

山形 辰史 編

『グローバル競争に打ち勝つ低所得国』

— 新時代の輸出指向開発戦略 —

研究双書 No. 五九二 アジア経済研究所



低所得国は負けるしかないのか

「競争が激しくなると貧困層は競争に負けて、より貧しくなってしまう」という一般的認識がある。ましてやその競争相手が先進国や、成長著しい中国だったりすれば、低所得国に勝つ見込みはない。だからグローバル化は阻止しなければならない、と推論は続く。

しかし現実の低所得国はそのように、ただただ弱いだけの国だろうか。低所得国には商売上手な店主、先進国を手玉にするビジネスマン、世界の尊敬を集める革新者（好例はバングラデシユのモハメッド・ユヌス氏）もいる。さらには、身を粉にして働く農家、炎天下で汗水流して働く労働者達もいる。彼らに国際競争力は全くないのだろうか。

労働集約産業で勝負

低所得国が国際競争力を有する産業の一つの典型は労働集約産業である。低所得国の貧困層は資産を持っていない。唯一貧困層が持っているのは自分の身体であり、その身体で裸一貫勝負する

ことになる。低所得国の低賃金労働力は、それを集約的に用いる労働集約産業の国際競争力の元になる。現実にはバングラデシユやカンボジアと

いった低所得国の主要輸出品は労働集約製品の典型の衣類であり、両国は世界の主要衣類生産国になりつつある。

「底辺への競争」を越えて

しかしこれに対しても大きな懸念が寄せられる。それは、低賃金を武器にする低所得国は、いつまでもそれを武器として用いる他に国際競争力を保持する手段はなく、貧困層の賃金は低いままに留まってしまつたのではないか。さらには、低所得国同士が低賃金を競い合つたら、賃金や価格の切り下げ競争が激化し、低所得国はより貧しくなっていくのではないか（これを「底辺への競争」と呼ぶ）、という懸念である。

実際、バングラデシユやカンボジアは世界で最も賃金の低いグループの国々である。だからこそ最も低賃金の彼らが国際競争に勝つたのだと言える。しかし、彼らの賃金がいつまでも

低いままかと言えば、そうとは限らない。彼らが生産する衣類への需要が増えれば、彼らの輸出する衣類価格への上昇圧力が働くし、衣類需要増に伴う労働需要増により賃金にも上昇圧力が働く。さらに生産性上昇が同時に起これば賃金を上げる余裕が生まれる。そうして賃金が上昇することにより低所得国の所得自体が上がっていく、それによって最も労働集約的な衣類への競争力が失われる。しかし、東アジアのかつての低所得国がたどつたのは、その後、より労働集約度の低い製品（例えば電気電子製品の組み立て）へと産業の重点を移していくことによって、産業構造を変化（または多様化）させる発展パターンであった。

このような発展パターンが現代の低所得国のいくつかで実際に起こっているのか、というのが本書のテーマである。実証分析として具体的に取り上げたのは前述のバングラデシユとカンボジア、そしてケニアの縫製業である。バングラデシユとカンボジアは上記のパターンの産業発展が始まつた例として、そしてケニアは、製造業の高賃金構造により、上記のパターンが見られない例として分析がなされる。

本書の構成

本書の構成はつぎのとおりである。第一部は開発戦略と構造変化に関する近年の理論のサーベイ、第二部は、この本のために二〇〇三年と二〇〇九年に三カ国で集めた数万件のデータを元にした実証研究、第三部はそれぞれ貿易自由化、労働者保護と貧困削減の

関係に関する実証研究のサーベイとなっている。

第一章 開発戦略の現在（山形辰史）

第一部 輸出指向開発の戦略と展開

第二章 近年の開発戦略論のレビュー

— 後発開発途上国における労働集約

産業の再評価（福西隆弘）

第三章 輸出指向工業化の展開— Poor growth と産業構造変化（川畑

康治）

第一部 輸出指向開発の事例

第四章 市場自由化と低所得国の縫製

産業—バングラデシユ、カンボジア、

ケニアにおける企業の参入・退出

生産性と利潤の変化（福西隆弘・明

日山陽子・山形辰史）

第五章 「底辺への競争」は起きてい

るのか—バングラデシユ、カンボジ

ア、ケニアの縫製産業で働く労働者

の厚生（明日山陽子・福西隆弘・山

形辰史）

第三部 輸出指向開発の条件

第六章 貿易自由化と貧困削減（樹神

昌弘）

第七章 労働者保護と貧困削減（湊

一樹）

本書でいくつかの低所得国の強さの一面を示した。最近の日本の縫製業界のバングラデシユ、カンボジアへの進出の活発化は、そのひとつの現れと言えるであろう。

（やまがた たつふみ／アジア経済研究所 貧困削減・社会開発研究グループ）